

ニュース・メディアに現れた“Pearl Harbor”に見るアメリカ人の対日観

—映画『パールハーバー』と米同時多発テロが喚起したイメージ—

大西 博人

1. はじめに

ハワイ諸島オアフ島の真珠湾は、2001年2月9日、愛媛県立宇和島水産高校の実習船『えひめ丸』が沖でアメリカ海軍の潜水艦に衝突され沈没した悲劇や、5月25日(金)に全米で、7月14日(土)には日本でディズニー制作の映画『パールハーバー』が封切りされたため日米の双方で注目を引いた。えひめ丸事件では、犠牲者の遺体に対する日米間での価値観の違いが見られた。映画では、日本上映に先立ち日本人に対する差別語が一部シナリオから削除されたこと、映画の場面では依然として日本人に対するステレオタイプ、例えば、日本軍の作戦会議が戦国大名のようにのぼり旗を立てて野原で行われるという描写が含まれていたことなどが、日米間の文化摩擦の側面を思い起こさせた。

本論文では、映画『パールハーバー』が全米で封切られたこと、米同時多発テロの直後にアメリカのニュース・メディアに現れた“Pearl Harbor”を含む表現をいくつか紹介し、これらを各文脈に従い解釈し意味づけたい。

Wierzbicka(1997, pp.15-17)は、『「キーワード」は、特定の文化において特に重要かつ顕著である言葉』であり、「諸文化は一部それらのキーワードを通して解釈できる」と説いている。ここでは“Pearl Harbor”をこのような「キーワード」とみなし、これを通して日本人に対するアメリカ人の文化の核としての価値観を考察する。

2. アメリカ人にとっての“Pearl Harbor”の記憶とイメージ

太平洋戦争は1941年12月8日(現地時間7日午前7時53分)の真珠湾奇襲攻撃により始まった。開戦の直接の引き金となったのは、ひと言で言えば、11月26日ハル國務長官が野村大使に手交した日本に満州

事変前への復帰を迫る「ハル・ノート」であった。日本政府はハル・ノートをアメリカの最後通牒と受け取り、12月1日の御前会議において英米蘭に対しての開戦を決定した。この日に山本五十六連合艦隊長官は、26日に択捉島の単冠湾からすでに出撃している機動部隊に8日の開戦を指示した。

日本政府がワシントンの日本大使館に打った日米交渉打ち切りの暗号電報は、長文で14本に分けてあり、13本は前日までに届いていたが、その内容は長々と日米交渉の恨みつらみが書かれていて至急電扱いではなかった。当日、朝早く14本目が到着し、外務省からはその通知電文を7日午後1時に渡せという指示がでていた。しかし、電文の趣旨が13本目まででは不明であっただけでなく、現地のタイピストを用いることを禁止していたため、暗号電文の解読もタイプの作業も前日までに終えていなかった。そのため野村・来栖両大使がハル國務長官にその最後通知を手渡したのが午後2時20分で、真珠湾はすでに1時間にわたって攻撃されていた。

ハルは暗号電文の解読により最後通告文を知っていたが、それを読むふりをしたのち腹立たしげに、50年にわたる公務生活においてこれほど「恥知らずの虚偽と歪曲に満ちた文書(a document that was more crowded with infamous falsehoods and distortions)」を見たことがないと言った。「卑劣な奇襲(sneaky surprise attack)」ということで「真珠湾を忘れるな(Remember Pearl Harbor!)」を合い言葉に、アメリカ国民は挙国一致で戦争遂行に協力することになった。

真珠湾前のアメリカでは、第一次世界大戦の教訓から市民の間では依然として孤立主義が強かったが、日本海軍が奇襲攻撃で真珠湾に大打撃を与えるとアメリカ全体がショックを受け、激怒し、復讐を誓い国全体が一致団結したのである。この強い感情を代

弁するかのように南太平洋軍司令官ウィリアム・ハルゼー提督は、「ジャップを殺せ、ジャップを殺せ、ジャップをもっと殺せ」と部隊に命令している。かくして「真珠湾を忘れるな。やつらを殺し続ける」が海兵隊のモットーとなったのである。(註1)

真珠湾攻撃に関しての権威である海軍軍人であり歴史家でもあるゴードン・ブランゲ(Prange 1982, p.582)は、アメリカ人が今日に至るまで怒っている理由として、1つには、アメリカ人はカモにされた(having been played for suckers)こと、また1つには、日本が正式に宣戦布告することなしに空襲したこと(initiating the air strike without formally declaring war), さらに、最もアメリカ人を激怒させたことは、日本が日米両国相互の問題を平和的に解決しようという表面的な善意の見せかけの下に(ostensibly in good faith, for peaceful settlement of their mutual problems)アメリカと交渉を行っている最中に攻撃が行われたということである、と述べている。

レイ(1991, pp.61-100)は、ブランゲのこの部分を引用し、上記の3つの理由に加えて当時のアメリカ人の心理的状态を分析し項目別に要約しているが、その主な点は次のようになっている。(1)日本人の行動は正気ではなく、日本人は指導者に盲従する愚かな国民だとするアメリカ人の見方。(2)自己満足と、日本という敵の過小評価。(3)当時のアメリカ人のプライド、傲慢さ、人種差別。(4)アメリカの行動は正義からでているという信念。

これらの項目を要約すると、日本人は西洋的な基準では予期できない行動をとり、人種的にも能力的にも劣っているとする認識である。一方、アメリカ人は民主主義と正義を信奉する優れた人種であり、プライドのあまり東洋人を見下す傲慢さがあったとする分析である。このような対日観が“Pearl Harbor”にも沈殿しているという仮説を設定し、ニュース・メディアの用例を検証する。

3. 映画『パールハーバー』が喚起した“Remember Pearl Harbor!”

スローガン“Remember Pearl Harbor”が時折メディアに顔を出すのは、これが喚起するイメージがアメリカ人一般の中に浸透しているからであろう。以下のオンラインより得た4例はいずれも5月23日

から25日までの報道であり、映画『パールハーバー』が全米で封切られた5月25日の直前であることから、この映画がアメリカ人の間に真珠湾の経験を思い起こさせる呼び水となっていると思われる。

① And Pai said racial taunting aimed at Mariner star Ichiro during a series in Oakland—including a few fans wearing “Remember Pearl Harbor” caps—was a chilling reminder that racial prejudice still exists. (seattletimes.com, 2001, May 23) (下線部は筆者による。以下も同じ。)

このシアトルタイムズ紙による報道は、中国系アメリカ人で映画製作者であるJohn Paiによるカリフォルニア州オークランドでのSeattle MarinersとOakland Athleticsとの試合についての意見である。彼は、イチローをやじっていた観客のうち2, 3人が“Remember Pearl Harbor”と書かれた野球帽をかぶっていたことを取り上げて、日本人に対する人種の反感が今なお存在していることを指摘している。

この帽子につけられたスローガンより、「今度はアメリカの魂ともいえる野球のメジャーリーグを日本人が攻撃するのか」と解釈したためである。それゆえPai氏は人種偏見がアメリカ人の中には今も存在している現実を見せられ、それが“chilling”であると形容しているのである。

② “Pearl Harbor” is a new recruiting poster for a war we won decisively 56 years ago. I’d hate to be an American of Japanese ancestry and view this movie with a roused-up “all-American” audience. Must we be roused? Do we still need to “remember Pearl Harbor!” in this rah-rah fashion? (msnbc.com, 2001, May 23)

このニューズウィーク誌の記事は、『パールハーバー』がアメリカ人に呼び起こす興奮や悪感情に当惑しているある日系アメリカ人の複雑な心情を物語っている。この記者は1人の日系人として、感情を高ぶらせたもっぱらアメリカ人からなる観客と『パールハーバー』を見ることを嫌っている。特に、日本の戦闘機が真珠湾を攻撃している映画の場面の後半で、主役の青年パイロットが空中戦で次々と零戦を7機撃墜するときの観客の反応を思い浮かべているのであろう。『パールハーバー』の映像がアメリカ人に愛国心と共に日本人に対する人種主義的感情を伴ってくるのを肌で感じるからなのである。ここでの

“Remember Pearl Harbor!”は、アメリカ人の側からの警戒心や復讐心を表すものではなく、それを聞く側の日系アメリカ人が耐えねばならない苦痛を表すものとなっている。

“Remember Pearl Harbor”は、上例①では野球帽に書かれたスローガンである。次の2例は車のナンバープレートとバンパー・ステッカーの場合である。

③ Once a month, Graves and other U.S. military survivors of the Dec. 7, 1941, attack gather at the Aurora Restaurant to say the Pledge of Allegiance, pray for the dead and catch up over a cup of mud Hats have pins that read “Freedom is not free,” and cars parked outside sport Pearl Harbor survivor license plates and stickers that read: “Remember Pearl Harbor.”(seattle-i.com, 2001, May 24)

これはシアトル・ポストインテリジェンス紙による記事で、真珠湾を経験した退役軍人が月1回、シアトルのレストランで「忠誠の誓い」を唱和し、戦死者を追悼し、コーヒーを飲みながら近況を語り合う集いをもっていることについてである。彼らがりつける車は真珠湾の生存者や遺族用のナンバープレートをつけ、“Remember Pearl Harbor”と記したステッカーをはりつけ、彼らの帽子のピンつき記章には「自由は代価を要する」という文句が書かれている。このグループは、自分たち仲間うちで教訓として真珠湾を忘れないでおくことを決意しているけれども、このように真珠湾の記憶に凝り固まった意思表示をしていることから、日本人に対する否定的な人種主義的感情を伴う敵対心も抱いているものと解釈できる。

④ Despite the painful memories, Pearl Harbor is never far from Weddle’s thoughts. He volunteers an afternoon a week helping visitors at Tahoma National Cemetery in Kent, and helps put on an annual Pearl Harbor Day observance at Evergreen-Washelli Memorial Park.

He often wears a blue windbreaker bearing his medals and Pearl Harbor insignia His pickup canopy displays a “Remember Pearl Harbor” bumper sticker Weddle is grateful

the new film is reviving attention for what he feels is the central lesson of Pearl Harbor, the need to remain vigilant. “Remembering it is the best way not to repeat it.” (seattletimes.com, 2001, May 25)

これは真珠湾生存者会の元シアトル支部長 Weddle 氏が、真珠湾記念日に年1回地元で行っているボランティア活動についての記事である。彼は勲章と真珠湾の記章をつけたウィンドブレイカーを身につけ、ピックアップ・トラックのひさしに“Remember Pearl Harbor”のバンパー・ステッカーをはりつけているが、用例①～③とは趣を異にしており、日本人に対する人種的偏見は表れていない。

彼はしばしば学童たちに真珠湾攻撃についてスライドをみせ、その経験を話している。彼は『パールハーバー』が真珠湾の教訓、“the need to remain vigilant”を復活させてくれたことに感謝し、その教訓を忘れないことがそれを繰り返さない最善策であると「常に警戒心を怠らない」ことを具体的な機会を通して子供たちに教育しているのである。

映画『パールハーバー』に関連したスローガン“Remember Pearl Harbor”は、用例④を除いて、アメリカ人のプライドの高さとその裏返しとしての暗部、日本人に対する人種主義的感情を伴っていると読み取れる。レイの分析(3)「アメリカ人のプライド、傲慢さ、人種差別」は、60年経過した現在でもアメリカ人の中に息づいていると考えられる。

4. アメリカ同時多発テロが喚起した “Pearl Harbor”

2001年9月11日朝、ハイジャックされた民間航空機によるニューヨークの世界貿易センタービルとワシントン近くの国防総省への同時多発自爆テロは、アメリカ人の世界観を覆し、恐怖と衝撃を与えた。8時45分ごろボストン発ロサンジェルス行きのアメリカン航空11便が北棟に、9時3分ごろボストン発ロサンジェルス行きのユナイテッド航空175便が南棟に激突し、南棟は9時50分ごろ、北棟は10時30分ごろ崩壊した。さらにワシントン発ロサンジェルス行きのアメリカン航空77便が国防総省に激突し、ニューアーク発サンフランシスコ行きユナイテッド航空93便がペンシルベニア州ピッツバーグ南東に墜落した。

これらハイジャックされた国内便4機による同時多発テロは、アメリカの経済力の象徴である世界貿易センタービルと軍事力の象徴である国防総省をねらったものであった。特に、両センタービルの崩壊は、世界の貿易と金融の中枢を麻痺させ、ニューヨーク株式取引所を4営業日の間閉鎖に追い込んだ。テロの犠牲者は、国籍では約80か国の人々を巻き込み2800人以上に及んだ。

このテロ攻撃は、合衆国が50州の近代国家として確立されて以来アメリカが、ましてや本土が外国勢力により攻撃を受けたことがなかったため、アメリカ人に与えた衝撃は恐怖と驚きと怒りの混ざり合ったものであった。アメリカのメディアは、こぞって当時は自治領であった真珠湾以来の事件であると書きたてた。15日朝、ブッシュ大統領はラジオ演説で国民に「野蛮な連中が米国民に宣戦布告してきた。我々はこの戦争に必ず勝つ」と宣言した。この日に発表された世論調査では、軍事行動を求める声が7割を超え、反戦の集いも開かれているが、その声はかき消されざりであった。

ここで注目したいのは、アメリカのメディアが例外なく“Pearl Harbor”を持ち出し、この事件を形容し報道したことである。事件の当該地メディアである *New York Times* と *Washington Post* 両紙の事件直後の報道のうち、“Pearl Harbor”の比喩を用いた用例をいくつか選び、以下で検討する。次の2例はこの事件がアメリカ人に与えた衝撃がどのようなものであったかを示唆している。

⑤ Today's attacks on the World Trade Center and the Pentagon stunned official Washington as have few events in recent times. The effect was likened by some to the attack on Pearl Harbor or the assassination of President John F. Kennedy. The deadly bombing in Oklahoma City in 1995 seemed eclipsed by what happened today. (newyorktimes.com, 2001, September 11)

⑥ Tuesday's story — of terrorist hijackings and assaults on valued institutions, of untold American deaths and unparalleled national horror — in fact will become a defining story for the next generation of American citizens. This is their Pearl Harbor, their Kennedy assassina-

tion, their Challenger explosion (washingtonpost.com, 2001, September 13)

これらの用例は、まず第1に、このテロ事件を真珠湾攻撃にたとえ、続いてケネディー大統領暗殺、スペースシャトル爆発に匹敵する事件であり、オクラホマ連邦ビル爆破事件も影が薄れるほどであると報じている。たとえられたこれら4つの事件は、真珠湾は奇襲攻撃、暗殺とシャトルは偶発事件、ビル爆破はテロとその性格は異なっている。これらすべての共通点は、死傷者数には大きな差はあるが、アメリカ人の信奉していたアメリカのシステムに対する誇りと威信を根底から覆した出来事であったということである。

この事件は、外国勢力によるという点で真珠湾と類似し、テロという点で連邦ビル爆破に似ている。しかし、このテロ事件が即座に真珠湾と結びつくというアメリカ人の認知過程の根底には、外国勢力によるアメリカへの攻撃に対する激しい憤りが潜んでいると考えられる。それ故、次のような真珠湾の直喩が用いられるのであろう。

⑦ He ran for cover under a car bumper with three other firefighters; the four had two oxygen masks, which they passed around. “It's a great shame,” he said. “I'm too old. It's like Pearl Harbor.” (newyorktimes.com, 2001, September 11)

これは、世界貿易センタービル北棟が崩壊した現場から半ブロックのところで指揮を執っていた、40年間勤務のベテラン消防署長 Cecil Maloney (61歳) の発言である。このような非常事態において、この年輩の消防士が状況を形容するのに“Pearl Harbor”しか思い浮かばなかったのであろう。

このような“Pearl Harbor”の比喩表現は、上例のように直喩だけでなくメタファーとして多く現れている。次の用例では、“another Pearl Harbor”が用いられている。

⑧ “I'm numb,” said Corinne Zuege, 49, of West Lafayette, Ind. “This is such a tragedy. They always said there would never be another Pearl Harbor, and there it's happened on our shores.” (newyorktimes.com, 2001, September 11)

これはテロ当日のアメリカ市民の状態を伝える報道で、見出しは“U.S. Reacts to Attacks With

Anger”となっている。人々は街頭の大型テレビの前に集まり、信じられない恐怖の映像を見てすすり泣く人もいれば、怒りで拳を振り上げる人もいれば、体が麻痺状態でただ立ちつくしている人もいたと報じている。

このような人々のうちの1人Corinne Zuegeさんも茫然自失状態で、決して起こりっこないといつも言われていた真珠湾がまた起こった、と述べている。彼女の発言の最後“on our shores”が、ハワイではなく本土のそれも首都圏を直撃したという衝撃を物語っている。彼女のこの事件に対する直感的な認識“another Pearl Harbor on our shores”は、アメリカ人一般の心境、プライドを踏みにじられた憤りと、警戒心を怠っていたことに対する口惜しさをよく言い表していると言える。

次の用例は、Henry Allenによる“The Message In the Smoke”と題するエッセイである。

⑨ “This is our second Pearl Harbor, right here in the nation’s capital and New York City,” said Sen. John W. Warner (R-Va.) after the Capitol was evacuated. But what’s the war about? (washingtonpost.com, 2001, September 12)

これは、バージニア州選出の共和党上院議員が国会議事堂から避難した直後の発言である。彼はこのテロ攻撃を「2度目の真珠湾」と表現し、用例⑧と同様に“right here in the nation’s capital and New York City”と、この攻撃が真珠湾とは比べものにならないことを強調し、同時に激しい怒りといらだちを表している。次の用例も、同日のワシントンポスト紙上でのコラムニストTom Shalesによるものである。

⑩ And it may have left the nation feeling more vulnerable and victimized than any single day since the attack on Pearl Harbor in 1941. Newt Gingrich, interviewed on cable’s Fox News Network, may have been the first to call yesterday’s attack “the Pearl Harbor of the 21st century.” Others used the phrase as the day wore on. (washingtonpost.com, 2001, September 12)

彼はこのテロ攻撃を「21世紀の真珠湾」と初めて呼んだのはギングリッジ議員であると紹介し、日がたつにつれて他の人たちもこの語句を用いるように

なると報じている。

同様に、ニューヨーク州選出の民主党上院議員は、“This is Pearl Harbor, 21st century.” (12日付NYタイムズ)と言い、ニューヨークポスト紙のSteve Dunleavyは、“The response to this unimaginable 21st-century Pearl Harbor should be as simple as it is swift—kill the bastards.” (13日付ワシントンポスト)と述べ報復を主張している。いずれも「21世紀の真珠湾」を用いている。

このテロ攻撃は、ハイジャックした国内航空便をミサイル代わりに攻撃目標に激突するという意味で従来の常識の範囲をはるかに超えた手口であったため、「21世紀型真珠湾」と表現したのである。この想像もできなかった事件を言い表すには、このようなメタファーに依存せざるを得なかったと思われる。

このように新たな奇襲攻撃を認識するために、真珠湾のメタファーを原型として、それに修飾語句をつけ加えて人間の言語的な範囲では表現しきれない特異で複雑な現実を、新しい真珠湾のメタファーを用いて表現している。以下のメタファーもこれに該当する。

⑪ Over the last few years, as concern grew about the possibility of a large-scale terrorist attack against the United States, senior U.S. officials and counterterrorism experts warned about a “digital Pearl Harbor,” a “nuclear Pearl Harbor,” even a “biological Pearl Harbor.” (washingtonpost.com, 2001, September 12)

これは合衆国高官と対テロリスト専門家が、合衆国に対するテロ攻撃の可能性を警告したものである。「電子的真珠湾」、「核の真珠湾」、「生物化学兵器の真珠湾」はすべてに、日本の真珠湾攻撃が原型となっている。つまり、アメリカ人にとっては合衆国に対する奇襲攻撃的な性格をもつすべての事件に、真珠湾のイメージが利用されているのである。言い換えると、アメリカ人はこれらの攻撃を「真珠湾攻撃」という認知的枠組、つまり、イメージを通して世界認識をしているのである。

これまで検討した同時多発テロ直後に現れた“Pearl Harbor”の比喩表現は、前章で考察した“Remember Pearl Harbor”と異なり、日本人に対する人種主義的な感情は表出していない。しかし、用例⑧⑨に見るように、アメリカ人の信奉する国家

システムとプライドが根底から覆されたことに対するいらだちがこの比喩表現には込められている。そしてこのいらだちは、真珠湾攻撃当時の日本人に対する敵対感情と同質のものであるように思える。

また用例⑩⑪では、アメリカに対する新しい型の奇襲攻撃にこの比喩を用いているが、これらの比喩はいずれも肯定的な意味を持ち得ず、「アメリカの正義に対する邪悪な集団による不条理な攻撃」という否定的な意味が核をなしていると考ええる。

5. まとめ

真珠湾攻撃の前、日本とアメリカ双方がお互いに相手国に誤ったイメージを持っていた。日本とアメリカの直接的な接触は、1853年ペリー提督が来航し、その後開国条約を調印し、下田に上陸したときにさかのぼる。具体的には、ペリーの将兵の印象記には、日本社会には色欲のおもむくままに行動して恥じない階級があり、日本人は性的に放縱な国民らしいと記録されている。^(註2)その後、日清戦争後に西欧列強によって国際政治の場で取り上げられた東洋の新帝国日本に対する「黄禍論(yellow peril)」^(註3)を背景として、「性的に放縱な日本人」というイメージが増幅されていった。アメリカでは、日露戦争後に突然増え始めた日本人移民に対する人種的偏見が公立学校で表面化した。

日本人の性的な放縱さというイメージと黄禍論は、サイド(Said 1995, p.3)の説く西洋人の抱く東洋は劣っているとする仮説、「オリエンタリズム(Orientalism)」の底流のなかで融合し、アメリカ人の対日イメージとして黄色人種に対する蔑視が形成されていったのである。ミラー(1992, p.351)が、「アメリカ人は日本人のことを、出歯で眼鏡をかけ、人まねをするために、いつもカメラをもって写真を撮っている背の低い黄色人種として見ていた」と述べているように、欧米人より劣っている黄色人種の日本人は真珠湾を攻撃する能力はないというのが当時のアメリカ人の一般的認識であった。^(註4)このようなアメリカ人の認識は、現在でも対日観の根底をなしていると考えられる。

本論では“Pearl Harbor”をキーワードとして、ニュース・メディアからの用例を検証した。用例①～③の“Remember Pearl Harbor”では、すでに述べたアメリカ人の日本人に対する否定的な見方と

復讐心が色濃く表れていた。しかし、用例④のように、「いつも警戒心を忘れるな」と、アメリカ人に警告しおごりをいさめる意味を持つ場合もある。

用例⑧～⑪では、“Pearl Harbor”にanother, second, the 21st centuryなどを伴い「卑劣な奇襲攻撃」を表している。これらを用いているアメリカ人記者は、歴史上前代未聞のテロ攻撃を言い尽くす表現法がないために、いわば苦肉の策として“Pearl Harbor”のメタファーを用いたものと考えられる。^(註5)アメリカ人読者もこのメタファーであるからこそ、この同時多発テロをかなりの確に認知できるのである。しかし、真珠湾奇襲攻撃と同時多発テロとは現象面では類似があるが、歴史的な文脈においてはその性格が全く違っている。奇襲に関しては、当時の世界では宣戦布告なしの戦争はまれではなかったし^(註6)、今回のテロは明らかに民間人を標的にしたものであったからである。

それにも関わらず、この比喩表現が用いられ、それがアメリカ人のスキーマを活性化させ、同時多発テロの現実認識を容易にしているというところに問題点があると考ええる。この卑劣なテロを描写するのに、何故ほかに適切で有効な表現法がないのであろうかということである。そこにアメリカ人の真珠湾奇襲攻撃に対する根深い怨念が潜在意識のもとに潜んでいるように思える。そして、その根底には、西洋人の東洋人に対するサイドのいうオリエンタリズムが存在しているからではないかと考える。このような対日観は平和時においては顕現してこないが、日米関係が悪化したり、大事件が起こるとキーワードとしての“Pearl Harbor”に表象されるのである。

日系歴史学者Donald Takaki教授によると、「米国政府が過去を清算したくない理由は、パールハーバーのイメージとコトバ(パールハーバー・カード)をいつまでもキープしておきたいからなんです。そうすれば、日米関係において何か事あるごとに、“リメンバー・パールハーバー”を持ち出して日本を責めることができますからね」と説明するように、このスローガンは日本人を敵に見立ててアメリカ人を団結させる政治的装置として有効に機能してきた。^(註7)

日本海軍による真珠湾奇襲攻撃は、強力な衝撃をアメリカ人に与え、その記憶は現在まで引き継がれている。タカキが指摘するように、その記憶は「パールハーバー・カード」という形で日米関係に摩擦

が生じるたびごとに表面化する傾向が見られる。また、たとえ表面化しなくてもアメリカ人の精神構造の奥深くに潜んでいると考えられる。

キーワード“Pearl Harbor”は、直接的に日米関係に関する事件でない同時多発テロの場合でも、無意識的としても必然的に日本人に対する否定的な態度を喚起する傾向がある。何か機会があるたびごとに人種主義的な色合いを帯びるこのキーワードは、比喩表現として現れる場合にはアメリカ人の対日観、すなわち、日本人に対する否定的な態度が沈殿している言葉であると言えるのではないだろうか。

注

1. ロナルド・タカキ 山岡洋一(訳)『アメリカはなぜ日本に原爆を投下したのか』(東京:草思社, 1995) 95頁参照。
2. 三輪公忠「日米関係の特徴—相互イメージを中心として」本間長世(編)『総合研究アメリカ 第7巻 アメリカと世界』(東京:研究社出版, 1976) 102-4頁参照。
3. 黄禍論は、1895年夏ごろドイツ皇帝ヴィルヘルム2世が描き、各国の君主や元首だけでなく国内の政治家にも贈った「黄禍の絵」に起源を持つ。この「ヨーロッパ人よ、汝の神聖な財産を守れ!」と題する絵には、黄色人種が町を破壊していく様を遠景として、ドイツの守護天使がヨーロッパの国々を教導く様が象徴的に描かれている。これは日清戦争後、中国が日本の指導によって動き出し、黄色人種の大波がヨーロッパに押し寄せてくるという想定に対する警告であった。ハインツ・ゴルヴィツァー 瀬野文教(訳)『黄禍論とは何か』(東京:草思社, 1999) 220-22頁参照。
4. 当時、『タイム』誌は、奇襲に関する記事の冒頭で、国民が時代の最大の重要事件に直面したときに発する言葉は「まさか、あの黄色いやつらが」だったと述べている。『ニューヨーカー』誌でさえ、日本人を「黄色い猿」と呼ぶ、酒場での人々の会話を紹介している。これらは、日本人は想像力と独創性に欠けるため、あんな意表をつく軍事行動を計画し実行できるわけではないという人種主義的反応であった。ジョン・ダワー 斎藤元一(訳)『人種偏見』(東京:TBSブリタニカ, 1987) 45-46頁参照。
5. 菅野(1985, p.249)は、このような表現法の限界

を「認識的苦境」と言い、「真理への的であるより、むしろ真理の辻褃合わせ」をするためにメタファーを用いると説明している。

6. 宣戦布告は、1700年から1870年までのヨーロッパでは107件が予告なしで、予告があったのは10件以下であった。1907年にオランダのハーグ平和会議で採択された戦争開始の条約の第一条では、「条約当事国は理由を付して開戦宣言、または条件を付した最後通牒の形式による明瞭な事前の通告なくして戦争を開始してはならない」とある。事前通告の時間について、オランダなどの小国は24時間を主張したが否決され、日英などの海軍国は寸前でもかまわないという了解の下に条約は成立している。アメリカは、1941年の夏から大西洋でドイツ海軍と戦争状態に入っており、宣戦布告なしにドイツと戦争をしていたと言える。秦郁彦(編)(1991b, pp 147-49)を参照。
7. 矢部武「日米に『新時代』はくるのか」『世界(562号)』(東京:岩波書店, 1991年12月) 83-90頁参照。

参考文献

- 阿部齊(編)(1992)『アメリカの政治』(USA GUIDE 3 POLITICS) 東京:弘文堂
- エマーソン, ジョン・K (1979) 宮地健次郎(訳)『嵐のなかの外交官』 東京:朝日新聞社
- 菅野盾樹(1985)『メタファーの記号論』 東京:勁草書房
- 秦郁彦(編)(1991a)『真珠湾燃える(上)』 東京:原書房
- (1991b)『真珠湾燃える(下)』 東京:原書房
- ミラー, ネイサン(1992) 近藤純夫(訳)『スパイ諜報戦争』 東京:KK 経済界
- レイ, ハリー(1991b)「アメリカ側から見た真珠湾」 秦郁彦(編)『真珠湾燃える(下)』 東京:原書房
- Prange, Gordon W. (1982) *At Dawn We Slept: The Untold Story of Pearl Harbor*. (New York: Penguin Books).
- Said, Edward W. (1995) *Orientalism*. 1978. (London: Penguin Books).
- Wierzbicka, Anna. (1997) *Understanding Cultures through Their Key Words*. (New York: Oxford UP)

(兵庫県立星陵高等学校教諭)